

月刊
うたらば

2019
9

今月のテーマ

外

今月の月刊うたらば、「外」というテーマのおかげなのか、素晴らしい作品が多い回となりました。景の美しさから主体の感情まで、「外」を使って巧みに詠まれた作品たちをぜひご堪能ください。



音程をすべて半音ずつ外すくらいには生きるのが下手です

(尾崎飛鳥)

表紙フォト短歌のカラー版やバックナンバーは公式サイトにてご覧いただけます。
作品の投稿も常に受付中！詳しくはサイトの募集要項をご確認ください。
短歌 × 写真のフリーペーパー『うたらば』公式サイト：http://www.utalover.com/

先生、僕の心は外側に開くようには出来ていません

(がね)

心を閉ざした主体の気持ちを詠んだ作品。なかば強引に、主体へと心を開くように迫る「先生」に向かって投げかけるような詠み方が素敵です。内側からは開く心。だからこそ強引に開こうとせず、内側から開けたくなるように誘導してよ、という主体の切実な気持ちも感じ取れます。

子どもなら外で遊べと言っていた父に叱られている外泊

(えんどうけいこ)

自分に都合の悪い状況になると過去の自分の発言すらなかったことにする親の特徴は「あるある」のひとつですね。完全に理不尽に見える状況ですが、親からすると子供を心配しての行動なので親子のこの溝が埋まることはないのが悲しいですね。

ヒーローよ巨悪を挫くより先に紫外線からわたしを守れ

(ともえ夕夏)

ヒーローといえば悪を倒す存在。でも、この作品にとっての一番の悪は紫外線なん

ですね。「巨悪」で世界が減ほされようとしていても、自分の問題⇨紫外線対策を最優先している傲慢な主体なのに、話が小さいのでクスッと笑えてくる。その温度感が心地よい作品です。

想像で、すい、へい、りー、べー、教室の外に漕ぎ出してるぼくのふね

(toron*)

誰もが一度は聞いたことのある元素記号の暗記方法を下敷きにした作品。化学の授業中、あまりのつまらなさに妄想を始めた主体の心の自由さが見事に表現されています。「船を漕ぐ」「居眠りする」という関連性もまた授業中のシーンに合っていて、入念な計算のうえで詠まれているのがわかります。上手い。

五月雨針を落とせばレコードのノイズの中に外つ国の風

(アヤカタン)

背景としての「五月雨」、そこから針を落とした「レコード」に焦点が集中し、流れた音とノイズから広がる「外つ国の風」で再び視点が広がる。視点の移動を伴いな

から描かれる景の美しさに惹かれました。「外つ国の風」という表現に日本語の美しさが出ていますね。

音程をすべて半音ずつ外すくらいには生きるのが下手です

(尾崎飛鳥)

表紙フォト短歌に選んだ作品。「音程をすべて半音ずつ外す」ことを「生きるのが下手」と断定している主体ですが、すべて半音ずつずれるとメロディラインとしては別に間違っていない、ということに気付いていないのが良いです。音痴なのではなく、少しだけズレているけれど、それなりに上手く生きているとも言える主体。下の句の句跨りはそんなズレが少しだけ垣間見えた部分なのでしょね。

私より先に泣いてる人がいて非常階段の扉を閉めた

(久藤さえ)

一首の中にたくさんの感情が凝縮された秀作。泣きたい気持ちで非常階段へ行こうとして扉を開けたら、そこに泣いている人がいたという状況。主体がなぜ泣きたかったのか、非常階段にいた人はなぜ泣いてい

たのか。背景を隠して事実だけを描いたことと読者の想像が広がります。先客を見つけた時の主体の苦しさもまた読者が想像しがいのあるシチュエーションですね。

圏外が減ってきたからなんとなく孤独も減ったような世界だ

(千仗千敏)

携帯の電波が届いているのはつねに世界と接続できているということ。それを安心感と考えるか、煩わしいと考えるかは人それぞれなのかもしれません。この主体はそれを安心感と捉えている様子。孤独が減ったかわりに増えてしまった何かがあるのか。少し考えさせられる作品でした。

疲れてるわけではないがもうおれは肉球以外触りたくない

(遠藤健人)

「それ、疲れてますよ！」とツツコミを入れたくなる作品でした。前半ではつきりと疲れを否定しているところが重症度を強調していて、後半のマニアックな主張で読者を不安にさせてくれます。こういう疲れて肉体的じゃなくて精神的なのでほん

のは実際に起こりうる状況、ということ。火葬場は故人に近い親族だけで向かう場所。全員同じ名字になることも十分にありえます。そのシーンの特異性に気付き、掘り上げられるのが作者の力なんですね。景の切り取りに圧倒された作品でした。

他には以下のような作品を採用させていただきますました！

カンガルーポケットからは晩成をしようなでかい仔がぴよんと跳ぶ
(酒れ井戸)

外線の電話の横のペン立てがちやつかり聞いている作り声
(久保哲也)

好きな曲以外は飛ばすスタイルで君の小言に相槌をうつ
(千原こはぎ)

駅弁の外装フィルムを破るとき爪を立てない人は優しい
(ふうらい牡丹)

外来の椅子の硬さに誰ひとり不満を言わず硬いままだ
(ともえ夕夏)

外出をするたび猫が持つてくる活きの良すぎる土産が嫌い
(衣未(みみ))

とタチが悪いんですよ。ご自愛ください。

少しだけ席を外した筈なのに海岸行きのバスに乗ってる

(葵の助)

これも「疲れてますよ」と心配したくなる作品でした(笑) 瀧音幸司さんの名作『もうダメだおれはこれから海へ行くそしてカモメを見る人になる』の主体の感情と共通するものがありそうです。瀧音さんの作品の主体は自覚していますが、葵の助さんの作品の主体は無自覚な分だけタチが悪い。遠藤さんともども、ご自愛ください。

人生は薔薇色だって言うときの寒色系の薔薇仲間外れ

(田巻由美子)

青いバラは2004年にサントリーが発して、2008年から流通するようになった。と思うと寒色系の薔薇の歴史はせいぜい10年ほど。古くからある慣用語が時代の変化についていけなくなった事実に気付いたところが見事です。薔薇色、という言葉自体のイメージがピンクですもんね。さらに10年後には意味が通じない言葉になっているかもしれません。

外巻きを見ればあしたの天気とか機嫌がわかるあなたの髪
(細川街灯)

きみの鳥を許してあげてケージから放して きみを許してあげて
(吉川みほ)

北風のリベンジとして旅人の外套を脱がせゆく春風
(風花 雫)

「外道めー」と揶揄されようと卵かけご飯にかけるのは味の素
(麻数)

自分だけ誰にも狙われず終わるドッジボールのような合コン
(たろりすむ)

うつくしいなあ 進学塾の門前に詩的な佇まいの親たち
(新道拓明)

JKからダメ男扱いされている森鷗外を慰める会
(西淳子)

おみやげに外国人が茶筌買う理由を訊けばエレガントと言う
(檜原もか)

スカートを捲れば海があることをあなたにだけは教えてもいい
(月丘ナイル)

点Pが用紙の外の春風にさらわれるよう補助線を引け
(袴田朱夏)

線上を動くのが「点P」の特徴。てんと虫が指先から飛び立つような感覚で、用紙の外へと飛び立っていく光景がしっかりと浮かび上がってくる美しい一首でした。これまで見てきた数字短歌の中でも五本の指に入るほどに一目惚れした作品です。

号外のように私のレントゲン写真に医師が群がってくる

(たろりすむ)

怖いですが。そのレントゲン写真に何が写っていたのでしょうか。一人の医師ではなく複数の医師が寄ってくるということは病状は複合的で、主体の容態は決して良いとはいえないものでしょう。そんな中で冷静に目の前の状況を詠んでいる主体。「号外のように」の比喩が効いています。

火葬場に向かうマイクロバスの中運転手以外全員関根

(関根裕治)

面白いシチュエーションを想像で詠む作品は多く見られますが、この作品がすごい

外壁が壊れてゐる、と告げてくる兄の見てゐたストリートビュー
(有村桔梗)

限りなく正しい居場所かもしれない黄色い線の内側にいる
(たかはしりおこ)

地球外生命体に聞いてみたい幸せそうに見えていますか
(くろただたけし)

水滴が外につかないタンブラー夏のしるしがひとつ減った日
(unnatural)

意外くつてはしゃがれましても君達の想定内で生きていません
(とき)

百円に人生賭けるおじさんの場外馬券売り場にも秋
(田中ましろ)

こはぎさん、ちゃんと話を聞いてください！衣未さん、それは僕も嫌だ！西さん、その会、めっちゃ気になります(笑) 次回テーマは「命」。ご投稿よろしくお願ひします！

次回テーマ

命

人命、命題、使命、命日、亡命、存命、いのち、「死」と隣り合わせの「命」に関する短歌のご投稿、お待ちしております！

10/5 (SAT) 締切